永井誠一

長崎の鐘はほほえむ

残された兄妹の記録

長崎の鐘はほほえむ　¥ 700

著者　永井誠一（ながいまこと）
発行所　女子パウロ会
代表者　福岡　光
107　東京都港区赤坂8丁目12—42
電話（03）408—2513 振替東京 101228

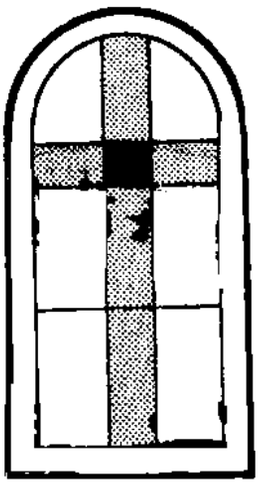
昭和49年8月9日初版
昭和50年1月25日再版

0095—746058—6100（日キ販）

永井誠一

長崎の鐘はほほえむ

された兄妹の記録



女子パウロ会

はじめに

昭和二十年八月九日、長崎市浦上地区の上空で原子爆弾が炸裂しました。歳月人を待たずと言いますが、幸い死から免れたわたしと妹の茅乃は、それだけに当時のことを即座に思い浮かべることができます。広島、長崎で被爆されたかたがたと同じように……。そして、しあわせにすでに長崎の町々は復興し、時代とともに変化しています。そのなかで教会のアンゼラスの鐘は、いまも鳴りわたっています。

たった一発の原子爆弾。浦上地区を中心に多くの犠牲者を出しました。わたしたちの母親もこの日の原子雲といっしょに昇天しました。第二次世界大戦ではじめて体験した敗戦――死んだ人と生き残った日本国民が新しい日本をつくり出したと言っても過言ではないでしょう。当時、被爆した父親・永井隆も六年足らずで骨髄性白血病で死にました。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

その間、父は病床で見聞したこと――浦上で復興に立ちあがる人たちの姿、終戦後の日本人の心情を見つめ、そして学究の専門分野の物療放射線の知識をいかして原子爆弾による被爆の恐ろしさを広く訴えることに努めました。『長崎の鐘』、『この子を残して』など著書を残してくれました。幸いに数多くのかたがたに愛読していただき、当時中学生のわたしと小学生の妹に励ましと愛情のこもったことばをかけてくださったり、手紙を書き送っていただきました。父の努力で、同じ被災者家庭の子どもさんたちよりはこうした激励のことばや、愛情を受けたと思います。この尊い隣人愛を心の支えとしてわたしたち兄妹は、明るく元気に、うれしいことはうれしいと感じ、悲しいことは悲しいと感じる素直な心の人間に成長することができました。

社会人になってまもない昭和三十四年七月、知性社の編集部のかたからのすすめで、この本を書きつづりました。わたしたちの幼いころの思い出、父母の思い出をまとめ、そして、ふたたび原子爆弾の悲劇をくり返さないようにとの願望をこめて、まとめる気持ちになりました。原子病に倒れた父の生活は、ひとしおわたしたちに、やがて死んでいく父の

父性愛を有言無言に示してくれました。父は大学生時代にキリストの教えを知り、カトリック教徒になりました。

その後の生活にキリストの教えが支えとなったことは確かです。原子爆弾の被爆――わたしたち家族が受けた被害は大きかったのです。しかし、これが天地万物の創造主なる神のみ旨であると信じ、慰め、励まし合って生活しました。無神論者の一部からは原子爆弾の被爆の本質をすりかえるものとの批判も、父の死後聞きました。でも亡父が闘病生活のなかで示した平和への努力は、わたしたちは忘れることのできないものです。

そうした父子の生活も日本の終戦後にはあったのかと、小石をひとけりしていただく気になり、女子パウロ会から再刊していただくことにしました。この本を書いたときは第二の人生――社会人となったときでした。そして十一年目の四十五年十月、思いがけなく戦時下の南ベトナム・サイゴンに特派員として勤務するよう命じられました。不幸にして原子爆弾または水素爆弾がわたしの上で炸裂し、撃たれてもよいとの念を抱いて出かけていきました。

二年半余のサイゴン生活は、わたしにとっては第三の人生と言えます。わたしにとって、妻子と一時離別したことは夫として妻子への愛情をたがいに確かめ合うために貴重な経験でした。しかし、それ以上に戦争の中での南ベトナムの人たちの生活を現実に見ることができ、涙を流すことができたのは恵みでした。ことばを文字として刻んだベトナム和平協定が発効した四十八年一月二十八日、南ベトナムの首都から記事を打電したことも忘れられないことです。協定が順守されなかったことは残念でしたが、「広島、長崎の原子爆弾被爆の悲劇が為政者の心の中に生きているぞ」との思いにかられました。こうした悲しみとうれしさを、新たに書き添えました。尊い犠牲となられたかたがたのために祈ります。

主よ永遠の安息を彼らに与え、
絶えざる光を彼らの上に照らしたまえ。
イエズス、マリア、ヨゼフ、ご保護のもとに安らかに息絶ゆるを得しめたまえ。

昭和四十九年六月三十日

永井誠一

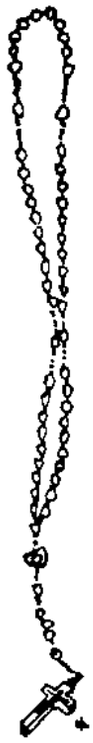
もくじ

はじめに……3
長崎の鐘はほほえむ……9
序　章　やさしきみ母よ……11
第一章　父母と子と運命と……20
第二章　原子野の鐘……62
第三章　ほろびぬものを……98
第四章　白ばらの花より香りたつごとく……125
第五章　風浪に流されず……155

終　章　新しき門出のまえに……179
泣き虫記者ベトナム落涙記……191
第一章　「戦争と平和」を考えるため……193
第二章　まだ戦いは終わっていない……204

カット　三木節子

長崎の鐘はほほえむ



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

序章　やさしきみ母よ

「用意はもうできたかね。もう行かんと始まるよ。深堀くんたちも、あそこば行きよんなさるけん、おまえたちも行きなさい。み堂の広場には、もうだいぶん、人も集まっとんなるばい」

原子病に倒れたお父さんは、また言いふくめるようにぼくたちに言いました。

「……」

「もうそろそろ行かんばおくれるぞ、誠一（まこと）、カヤノ行こう」

お父さんは、また言いふくめるようにぼくたちに言いました。

「お父さん行きましょう」

ぼくは立ち上がって、カヤノの手を引きました。

その日は、ぼくたちにとって悲しい日でした。忘れようとしても忘れることのできない

思い出がよみがえってくるからです。あの日からだいぶ日もたち、それに、お父さんも病床に伏せたままとはいえ、ぼくたちのそばにいてくれるのに、ぼくもカヤノも悲しくてたまらないのです。幼い胸に思い出がよみがえればよみがえるほど、悲しみに胸がふるえるのです。涙がにじみでてくるのです。お父さんはしきりと、

「もう行かんば、おそくなるばい」

とやさしく言いました。

はきふるしたズックのくつに紺サージの服と半ズボンをはいた日焼けした顔のぼく。ピンクの花模様に黄色のヒモつきの洋服にげたばきの妹のカヤノ。髪はぼうぼうにのび、白髪がめだち、おまけにロヒゲもあごヒゲものびほうだいにのびて、先の方は赤茶け、外へ出るには杖をたよりにしなければ歩くことのできないお父さん。焼け残ったモンペに大島ガスリの羽織のおばあさんと、一家そろってみんな黙ったまま焼け跡を歩いて行きました。あたりは、焼けガワラと灰ばかりです。そんななかに、トタン小屋や、掘っ建て小屋がぽつんぽつんと建ってはいるものの、白骨や、くろぐろとした遺骨がまだかなり散らば

っていました。宅地にはほとんど犠牲者の遺骨が整理もされないままに横たわっていました。拾ってくれる人もないのは一家じゅうが爆死したからでしょうか。無情無残にも、日ざらし雨ざらし、吹きざらしのままになっていました。その間をぬっていつとはなしにできた小道を、お父さんを先頭に、ぼく、カヤノ、おばあさんの順で足どりも重く歩いて行きました。

ぼくの胸には白い布で包まれた、焼け残りのバケツが、両手にしっかりとかかえられていました。それはとてもとても軽いものでした。でも、バケツの軽さとは反対に、抱きかかえているぼくの胸は重く沈んでいました。

ぼくたちは、昭和二十年八月九日、原子爆弾で爆死した、ぼくたちのお母さんを抱き、浦上天主堂で行なわれる死亡信者の合同葬に参列するために急いでいたのです。

ぼくは、杖にすがって歩いているお父さんの弱った背中を見つめているうちに、

「もうそろそろ、行かんば、葬式が始まるよ、誠一、カヤノ、行こう」

となんべんも、なんべんも催促した出がけのお父さんのことばを思っていました。その背

中からへきょうは、おまえたちのお母さんの葬式の日だよ。きっと悲しいにちがいない、まだ幼いのだからね。でも行っておあげ、お母さんもよろこぶよ、待っているよ、おまえたちの来るのをね。はやく行こう、誠一、カヤノ。ほら、みんなが急いでいるじゃないか〉と、幼かったぼくとカヤノの二人を無言のうちに慰め、励ましている意志を感じたのです。でも、お父さんの背中も泣いていました。

坂道を下りるとき、さら、さらとふれあうのでしょうか、バケツの中のお母さんは、軽い音をたてました。まだお母さんが生きていたころ、日曜日のごミサにあずかるとき、ぼくたちが先を争って駆けのぼり、そして元気よく一気に駆け下り、得意そうに笑顔であとから来る両親を待っていたこともあったこの教会の石段。今はもう、この石段を上るときの震動で、カサカサとただ音をたてているだけのお母さんの変わりはてた姿……。

簡単につくられた会場（今は司祭館が建っています）には、百五、六十人の人たちが集まっていました。白いベールが会場に揺れていました。おたがいに目礼しあい、席に着きます。遺骨を胸に抱いて、肩をふるわせてすすり泣いている人たち。ロザリオを手に、お

祈りを唱えている年老いた人たち。キョトンとしてあたりを見まわしている子どもたち。参列者はおもいおもいの悲しみ、思い出をもって、その日の合同葬儀に参列していたのでしょう。ふだん着のまま参列している人が多く、身なりはみんな貧相なものでした。式が進むにしたがって大人も子どももこらえきれなくなって、みんな泣きました。ふかいふかい悲しみが会場いっぱいに流れていました。

「主よ、永遠の安息を彼らに与え、絶えざる光を彼らの上に照らしたまえ」

「彼らの安らかにいこわんことを、アーメン」

「願わくは、死せる信者の霊魂、神の御あわれみによりて安らかにいこわんことを、アーメン」

やさしきみ母よ　いま見そなわし
み国にかえりし　なが子をみ手に
いだき迎えて　はごくみたまえ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com